

今回の AIT からの研修生受け入れで、私は、研修生の訪問先の設定等を担当させていただく機会を得た。何しろ受け入れ側に立つ経験は初めてで、いたらなかったところ、またでしゃばりすぎて足をひっぱったところは多々あったと思うが、ジェンダー研究センターのスタッフのみなさん、とりわけ一緒に仕事をさせていただいた佐藤さんをはじめ、舘先生、足立先生にサポートをいただきながら思いがけないほど実り多い経験をさせていただくことができた。なかでも、自分が日常を送る日本社会について、また日本社会における自分のポジションについて新たに考えるきっかけを得たことは、個人的に大きな収穫であった。

私が携わった仕事は主に研修生の訪問先の設定で、具体的な業務としては研修生の研究関心に合わせた訪問先のリサーチ、コンタクト、そして研修スケジュールにあわせたインタビューアポイントの設定を行った。しかし今回研修に参加したニーラさんとジンマールさんの研修対象は、いずれも私個人の研究対象や研究関心とは異なっていたため、日本国内といえども私自身に利用できるようなネットワークはなかった。そこで作業開始当初にできることといえば、インターネット検索による情報収集や研修生本人から希望のあった NGO 等にコンタクトをとることだった。今考えれば、自分がコンタクトをとっている相手のことを十分に把握しないままインタビューをお願いするという非礼を犯していたと思うが、コンタクトをとらせていただいた組織や研究者の多くからは、予想以上に好意的な反応をいただき、多くのインタビューを設定することができた。

その理由は、研修生の研究関心のおもしろさと同時に、コンタクトをとらせていただいた方々のご厚意によるところが大きい。なかには、研修生のインタビューにさらに適すると思われる知人や他の組織に連絡をとってくださった方もおり、研修生の関心に可能な限り応えたいという強い思いを感じることができた。そして驚いたのが、そのご厚意が、それぞれに携わっていらっしゃる仕事への献身だけでなく、研修生の関心やお茶の水女子大学に対する信頼や期待に裏づけられていることが、メールの文面からも見て取れたことである。例えば、ビルマの民主化を支援する NGO を主催されている方は、ミャンマーとの関係からいけば政治的に難しい立場で活動をされているにも関わらず、団体の政治的見解以上に、研修生の関心を重視したインタビュー協力者の獲得にご尽力くださった。これは、お茶の水女子大学に対する信頼があったからこそその対応であったと思う。また、私自身の研究や、他の大学院生の研究に対して逆に質問を受けるなど、お茶の水女子大学における研究動向に寄せられる関心を感じることもあった。自分のフィールドであるエジプトでしか調査経験をもっていない私にとって、正直なところ、今回のようにお茶の水女子大学に籍を置く大学院生としての自分の社会的立場に対する期待を実感したのは初めての経験だった。また、研修生とアテンドをしてくれた博士前期課程のみなさんも、その期待に存分に応えていたのだろう。インタビューを終えた訪問先からは、今後の協力関係を期待するという声とともに、彼女たちへの賛辞もいただいた。

しかし、多くの訪問やインタビューが順調に進んだ裏には、やはり訪問を受け入れてくださった方々からの助言があったことが大きかったと思う。ニーラさんの場合は、日本に住むネパール人の女性との個人的なインタビューを希望されていたことから、候補者を探すことが難しかった。フォーマルな関係性をたどるのではコンタクトをとることすら難しい、そうした女性たちとのインタビューを実現するためには、アドバイスを与え、個人的なつながりを駆使して候補者を紹介してくださった日本人研究者や、インタビューを受けるだけでなく、さらに知人を紹介してくださったネパール人女性の協力が不可欠だった。また在日ビルマ系難民に関心をもっていたジンマールさんの場合には、インタビュー候補

者を紹介していただくのと同時に、在日ビルマ人にインタビューする際の政治的リスクやインタビュー協力者が日本国内、国外においてこうむりうる現実的な困難について、関連NGOの方から細かく的確なアドバイスをいただかなければ、思わぬ問題を引き起こしていたかもしれないと思う。この点において今回の経験は、私が今まで知っている信じ、疑ってもこなかった日本社会の内部に、存在を意識したこともない私にとって異質の利害関係を生きる人々がいることを発見する契機となった。この経験は、日本について批判的に考察する視点を与えてくれたという意味で、私にとって大きな収穫だった。

また、ニーラさんとジンマールさんが研修の最後に行った研究報告も非常に興味深かった。とりわけ、いくつかの訪問先に同行したニーラさんとは、彼女が調査の中で得た情報もある程度共有し、それについての意見交換も行っていたため、彼女が最終的にどのように分析を行うのかに興味があった。研究計画書やインタビュー項目に目を通し、訪問先を設定し、部分的には同行した上で、新たな知見について議論をする。この一連の流れはいわばある調査の一部始終を観察しているような経験であり、自分以外の調査でここまで深い関わりを持ったのはもちろん初めてのことである。こうして、自分が調査を協力する側に身を置いたことで、自分が協力を求めなければいけない場合における心構えのようなものも垣間見ることが出来た。特にニーラさんからは、調査に関する希望を明確に伝えることの重要性を感じさせられた。不可能だと思われた、在日ネパール人女性との個人的なインタビューを実現することができたのは、彼女の熱意と、最後まで希望を伝え続けた強い意思が重要だった。彼女の熱意が伝わったからこそ、周囲の人が一所懸命に手を差し伸べてくれたのだと思う。

今回の研修生の受け入れに関わったことは、お茶の水女子大学という日本の大学機関に籍を置き、研究活動をしている自分の社会的立場を考える機会となった。そのきっかけの一つは、お茶の水女子大学の博士課程の学生という存在に信頼を寄せ、期待を持ってくれる人々がいるということに、いまさらながらに自分の研究に対する姿勢を正される思いにさせられたことである。また二つ目に、お茶の水女子大学に在籍するという意味を積極的な意味において実体験を通して確認することができたためである。本文で説明をしなかった二点目について補足しよう。ニーラさんやジンマールさんのお茶の水女子大学での研修に向けられた期待には、その大学で学ぶ学生たちとの交流も含まれていた。今回は博士前期課程の学生が活躍し、その任務を充分に果たしてくれていたが、特に博士論文の執筆を控えたジンマールさんは、博士後期課程の学生との交流も期待していたはずである。今回の研修に博士後期課程の学生がほとんど関わらなかったことは、研修生にとっても、また参加をしなかった学生にとっても残念なことだと思われる。本研修では、信頼関係を基礎としたAITの大学院生との交流が実現したが、こうした経験は他では得がたいものである。大学に在籍することに付随するこうした特権を享受するためにも、また相手の期待に応え、彼女たちの研修をより充実したものにするためにも、より多くの大学院生、とりわけ博士後期課程の学生による積極的な参加があれば、さらによかったのではないだろうか。

とはいえ、こうした感想をもつに至ったのも、研修に実際に関わったからである。そして当初の業務が訪問先の設定だったにもかかわらず、ずるずるとでしゃばり、訪問先の同行までかって出ってしまったのは、ただひたすら楽しかったからである。今後もこうした機会があるのなら、この楽しみを博士前期課程の学生に独占させておかず、多くの博士後期課程の学生が積極的に参加することを期待する。